2021年12月11日（土）山陽新聞　[スポーツ]

情報の力で日本柔道躍進

ライバル分析、五輪金「９」貢献

全柔連科学研究部 藤本さん（川崎医福大講師）に聞く

スポーツ界でデータや映像分析の重要度が増している。日本のお家芸、柔道も例外ではなく、全日本柔道連盟の科学研究部が東京五輪で過去最多９個の金メダルを獲得した日本代表を下支えした。研究部のメンバーとして海外選手の試合映像の収集や分析に13年間にわたり携わってきた川崎医福大医療技術学部講師の藤本誠さん（教科教育学、武道学）に、し烈な〝情報戦〟の舞台裏を聞いた。

（長瀬庸一）

◇

―科学研究部は、どのような組織か。

「全柔連の強化委員会に属し、総勢42人。多くは大学関係者で生理学、栄養学、コーチング学など専門は多岐にわたる。強化選手の体力や体格、運動能力の測定、栄養素の摂取や減量、心理状態、外国勢についての研究など競技力向上に関する活動を行ってきた」

―藤本さんの担当は。

「まず世界中の国際大会に出向き、全試合を撮影する。対象は五輪、世界選手権、グランドスラム、世界ジュニア選手権などで１大会当たり600試合になることもある。海外勢の組み手や得意技、技を仕掛ける時間帯、得意なのは寝技か立ち技かといった情報をチェックし、専用の分析ソフト（通称ゴジラ）に入力する。日本代表のコーチや選手から『この選手のこの時の映像が見たい』と要望があれば、瞬時に示せるよう編集し、準備する。情報をいかに勝利に結び付けるか、その戦略を描くサポート役だ」

―活動は2008年から13年になる。

「前半の７年はフランス、ブラジル、韓国、ロシアなど約20カ国に撮影のため足を運んだ。大会日程が重なり、毎週のように海外出張した時期もあった。後半の６年は若手部員が撮影してきた映像の分析作業を主に担った。今年の東京五輪の期間中は映像競技分析サポートの一員として試合会場の日本武道館の隣にある科学技術館にこもり、その日の試合をリアルタイムで分析。選手やコーチに情報提供も行った」

東京五輪で日本選手団の映像分析などを担当した藤本誠さん＝川崎医福大

ふじもと・まこと　光南高などで教員を務め、岡山県体育協会（現県スポーツ協会）事務局次長などを経て川崎医福大講師。2008年から全柔連科学研究部員として強化選手の体力測定、外国勢の分析を担当してきた。鹿屋体大大学院出。52歳。倉敷市在住。1992年バルセロナ五輪代表の藤本（現姓渡辺）涼子は実姉。

―12年ロンドン五輪では男子が金メダル無しに終わるなど惨敗。そこからの科学的なアプローチが復活劇につながった。

「長い年月と多大な労力を費やし、映像分析してきたので今夏のメダルラッシュには、ほっとした。選手・コーチから感謝の言葉も頂いたが、素晴らしい成績は日本代表チームの努力のたまもの。われわれは後方支援しただけだが、少しでも不安要素を取り除き、メダル獲得の役に立てたのであればうれしい」

―今の日本の柔道界に大切なことは何か。

「一番感じるのは『科学的根拠に基づく指導』の重要性だ。いまだに経験や勘に頼り、根性論もまかり通っている。例えば柔道の組み手は握力が重要といわれてきたが、トップ選手の握力は必ずしも強くない。必要なのは指先で道衣を引っ掛ける力。それなら指先を意識的にトレーニングすることで効果は上がる。『この練習は何のため』『どんな効果があるの』という選手の疑問に的確に答えられる正しい知識を身に付ける必要がある」

―東京五輪を区切りに科学研究部から離れる。

「全柔連の会員登録人数は06年度を最後に20万人を下回り、現在は約12万人と急速に減少した。柔道の素晴らしさ、楽しさを伝えることは急務だ。私は現在、全柔連のＡ・Ｂ・Ｃ公認指導員養成講師や教員免許状更新講習講師を務めている。これまでの経験を生かして指導者の育成に尽力し、恩返しできればと思う」